大学生のあがり性

21011268 苫米地康太

１　目的・動機

人前で興奮状態になって赤面してしまったり、自分を見失ってしまうという現象は一般的に「あがる」といわれています。あがりは多くの人が日常的に遭遇する現象です。

この研究では人がどのような状況で「あがる」のか、あがる状況と個人の性格には関わりがあるのか、身体的・精神的にどのような状況になったらあがり性であるといえるのかを調べていくことを目的とします。

動機としましては、私自身があがり性であると自覚しているので、同じ年齢層である大学生であがり性だと思われる人は、どのくらいの割合でいるのかという点に興味を持ったからです。

2　内容

自分で作成したアンケートを使用します。評価については 5 段階に設定しました。性格面に対しての質問と場面ごと（大衆に向かって話す場合、面接で話す場合、初対面の人と会って話す場合）の質問を合計 39 問設け、この関係性について調べていきます。

3　方法

多摩大生 10 人を対象にアンケート調査を行い、その結果を SPSS の T-検定で分析します。

4 結果

対応サンプルの検定

	対応サンプルの差					t 値	自由度	有意確率 (両側)
	平均値	標準偏差	平均値の標準誤差	差の 95% 信頼区間 下限	差の 95% 信頼区間 上限			
ペア 1　VAR00011 - VAR00023	-1.16667	1.16905	.47726	-2.39350	.06017	-2.445	5	.058

対応サンプルの検定

	対応サンプルの差					t 値	自由度	有意確率 (両側)
	平均値	標準偏差	平均値の標準誤差	差の 95% 信頼区間				
				下限	上限			
ペア 1　VAR00013 - VAR00025	1.50000	1.22474	.50000	.21471	2.78529	3.000	5	.030

対応サンプルの検定

	対応サンプルの差					t 値	自由度	有意確率 (両側)
	平均値	標準偏差	平均値の標準誤差	差の 95% 信頼区間				
				下限	上限			
ペア 1　VAR00015 - VAR00027	1.66667	1.36626	.55777	.23286	3.10047	2.988	5	.031

上図のように大衆に向かって話す場合と面接で話す場合に共通する10個の質問項目でT-検定を行い、その中で3つの質問項目に差が出た。(有意確率は1%～5%に設定した。)
よって、この調査は有効であったといえる。

5 考察
私としては、半数以上の質問項目で有意確率に差がでるのではないかと考えていた。もう少しアンケートをとる人数を増やせば結果は変わってくるのかもしれないと思った。